

## 京都再発見

京都洛北RCのご縁で

206

私は、仕事のお蔭で五〇年を、商用の旅でずいぶん各地を廻ったが、青二才時代も、あれこれ節約しても旅館だけは其の土地での一流を選んだ。衛生的で心豊かに休養がとれるからである。

京都では、麩屋町の「柊家」と問屋町の「晴鴨楼」が好きであった。戦後であるが当時一流であった「都ホテル」に宿泊した折、全従業員の「要求貫徹」なる勇ましきハチマキ姿にはガツカリした。

京都は、いつ幾度訪れても飽きず、見果てぬ、大好きな街である。奥深い歴史があつてワビがあり、サビがあり、もの静かなたたずまいに加えて、雅やかな京都なまりにも魅力があり、華麗な手造りの和菓子、仁清、乾山を偲ばす京焼など……。

長女と長男を相次いで京都に学ばせたのも、こうした私の先入感からで、この二人の八

カ年を陣中見舞の口実に京都を訪れるのが、この上もない喜びであった。長男の下宿は高野川のほとり、北山杉の山並みも遠からぬ田園の中に在った。

楽隠居したら此の界限で……と、土地を求めようかとさえ考えた事もあつたが、計らずも今の洛北RCのテリトリーであるのも奇縁である。

こんどの竜安寺は、何回目かであるが、あの縁側にゆっくり坐して瞑想、心眼で視る禪の庭であると思うが、悲しいかな、私には到底その境地にはなれない。工事中で見られなかったが、ここに有る「吾れ、唯、足を知る」の石の手洗鉢は誠にやきついている。

金閣は背景の衣笠山があつて引き立っているが、池の中に浮んで見える黄金の楼閣にこそ美観を発見する。義満ほどの風流人、定めし、それを計算にいられたの設営であつたらうか。

この近くに、「旅亭きぬかけ」が在って、しゃれた和風で、かつては、よんごとなき御仁の別邸らしい風情である。昭和二四年頃の早春の一夜を比喩で過したが、底冷えのする翌朝、障子をあげると庭園は、意外や美しい雪景色である。青い竹、真紅の椿の白との配色が素晴らしく、そして目を上げると、「きぬかけ山」が華麗な銀色に映えていて、まさに天下の絶景である。

昔、足利義満が、暑いある日、涼感を求めて「あの山に雪を降らせよ」と下知を出した。世は思いのままになる驕れる將軍の難題であつた。京は上を下への大騒ぎの果て、街中の

207

白絹をかき集めて山を包み、雪に見せた。爾来、この山を「きぬかけ山」或いは「衣笠山」と呼ぶようになった……と。

幸運なるかな、今朝の柴田将軍は偶然にも、大自然に恵まれて雪の「きぬかけ山」を望み見たのである。帰りがけに女中さんが、スペシャル・サービスに案内してくれたのが、時の自由党の大野伴睦親分が、今のロッキードのような汚職にからんで身を此処に潜めたが、検察に踏み込まれた彼氏は、とっさに、ふとん部屋に逃げ込んだ。豪華な二階の一室に金屏風が立っていて、それをよけると廊下に通じて押し入れがあった。元禄の昔、吉良の屋敷の掛軸の裏に逃げ道があった、それである。くだんの女中さんの曰く「新名所どっせい……」と、なるほど迷所だわいと苦笑を禁じ得なかった。

洛北さんとの懇親会で隣り合わせて名刺交換すると、「株式会社きぬかけ菓舗、社長北浜清一」とある。私が「旅亭きぬかけ」を憶い起したのは当然で、私の物語に北浜さんの目は反応に輝き「私の工場は、その近所です。あれは昭和十五年、さる財界人が金に糸目をつけず建てたもので、若くて美しい女将が居たでしょう……残念にも近年とりこわして、鉄筋の電報局が建ちました」と。もう一度、訪ねて見たかった私はガックリしたが、三〇年忘れ得なかった消息を、詳細に御存知の北浜さんと隣り合ったのも、ロータリーのとりもつ奇縁であった。

(金沢北RC 会報No.八九 昭和五二年四月二八日)

## ロータリーの道は仏の道

ガバナ―石黒さんは、「ロータリーの道は、仏の道」と、喝破されたのは素晴らしい。しかも「私有家業を継ぐとき、己の為に財を考えるな、人の為に財を果たせ」という先祖の遺訓が、後年、ロータリーの奉仕の理念であることに気づいて、心が大きく開けた」と。さすが真宗王国に伝統ある素封家の戒律の中に育った人だ。と、敬意を表して止まな

い。

仏教の「慈悲」も、キリストの「愛」も、孔子の「仁」も、煎じ詰めれば等しく「他を先にする心、思いやりの心」であり、全くロータリーの心であると私は思う。

釈迦は、喜捨の意義と、布施の功德を説いて、清浄な心をもって世のため、人のために施し恵む思いやりの心こそ、仏の道だと訓えている。

弟子が釈迦に尋ねた。

「私は貧乏で施すものではありません。どうしたらよいでしょうか。」

「あなたは優しい笑顔ができるか。」

「ハイ、笑顔ならできます。」

「もうひとつ、人に優しい言葉をかけることができるか。」

「ハイ、それもできます。」

「それは和顔愛語と言って、非常に功德のある大切な布施だから、それを、心にこめて施しなさい。……もうひとつ、あなたは、うれしい涙は出るか。」

「ハイ、悲しい時も、うれしい時も涙は出ます。」

「それなら、人が善いことをしたら、アア善いことだ、と喜んであげなさい。喜びのあまり、うれしい涙をこぼせば、善いことをした人も喜ぶでしょう。……それは、随喜の功德と言って、非常に大切な喜捨の心です。」

(第二六一地区 石黒伝六ガバナー月信No.三 昭和五二年八月十五日号)

## ロータリアンへの遺訓

二宮尊徳翁と坂本惣平さん

昭和四九年九月十二日の当クラブ第四八回例会で、坂本惣平さん(高知県中芸RC会員)が「偉大なるロータリアン二宮尊徳」と題してご講演くださった。その要旨を清水情報委員長の要約によれば……

「二宮尊徳……戦前は、勤勉と節約のシンボルとして近代日本人の思想形成の偶像であり、指標であった。現代は、その思想を解し得ない若者によって偶像の座をおろされようとしている。しかし、尊徳の偉大さは、単なる勤勉家たる点にあるのではない。その思想と行動の根底には、自由と平等と博愛の精神があり、この世を良くしようとする至誠の念があった。物質に偏せず精神にかたよらず、自己に偏せず他人にかたよらず、物心一如、自他一如、一円融合の思想に徹した。この思想と行動こそ、ロータリアンの奉仕の真の姿である。ロータリー以前の偉大なるロータリアンとして、二宮尊徳を、われわれは今一度見

直す必要があると思う。」

以上は、坂本さんの尊徳観であるが、一方、大阪R.Cの塚本義隆バスターガバナーは、もう一人の強烈な尊徳信者を紹介しておられる。それは、戦前の大阪R.Cの指導的役割を果たした土屋大夢（之作）氏で、日本操觚界の大先輩であるが、二宮尊徳の研究者で、深く尊徳を思慕し傾倒し、ロータリー以前に生まれたロータリアンであるとして、日本中よりもよりアメリカにまで出かけて、尊徳に学べと吹聴して廻ったということである。

私は、二宮尊徳の知識は浅いが、坂本さんは尊徳の道の実践に努力した人であることは事実で、生糸の生産に生涯をかけ、事業の経営と自らを律するには厳しく謙虚に、他人に対しては和顔愛語、思いやりと温情に徹した、正に当代ロータリアンの標本のような人であった。

この坂本さんと私は、ロータリーが取りもつ縁で結ばれ、ここ数年来、深い友情が交わされ、私も多くを学んだのである。が、去る二月旅行中の京都にて急逝され、私は親を失ったように落胆した。告別式に馳せ参じたかったがその意を得ず、漸く去る七月始め墓参を兼ねて坂本さんの御遺族をお訪ねした。

坂本さんのご健在であった当時の社長室にたたずんで、在りし日の陣頭指揮の本陣に感慨こめて追憶を新らたにした次第であるが、特に私の胸を打ったのは、坂本さんが死の数

日前、自ら会社工場の掲示板に白墨で書かれた言葉が、今は社員への遺訓となり遺書となったが、会社ではこれを永遠に伝え残すべく樹脂加工して、遺影と共に会議室に保存されている。その全文は……。

心を形で示す工夫を大切にしよう。

挨拶も心を形で示すもの。

生糸づくりも心のあらわれです。

形、形式を馬鹿にするな。

心を言葉と礼儀であらわすけいこをせよ。

坂本さんは、「売って喜び、買って喜ぶ取引をします」と宣言し、事業を健全に繁栄せしめ、ロータリーの心を実践し、その直前まで高知県教育委員長として貢献し、その遺体は生前からの遺言によって献体され、その上、不滅の数々なる遺訓を後世に残された。正に偉大なるかな言行一致の巨人であった。

（金沢北R.C 会報No.九六 昭和五二年八月十一日）

## 栄光への四と一〇〇と二一〇〇

金沢北RC四カ年の業績

四……昭和四八年十月三日は、われらの金沢北ロータリークラブ誕生日で、こんど満四周年を迎えたのである。

一〇〇……クラブ会報第一号が創刊されたのが、その月の十一日で、以来一回の支障もなく、ここに第一〇〇号を数えるに至った。

二〇〇……創立総会の行われたときが第一回の例会で、爾来一回の滞りもなく、去る十月六日が、正に二〇〇回目であった。

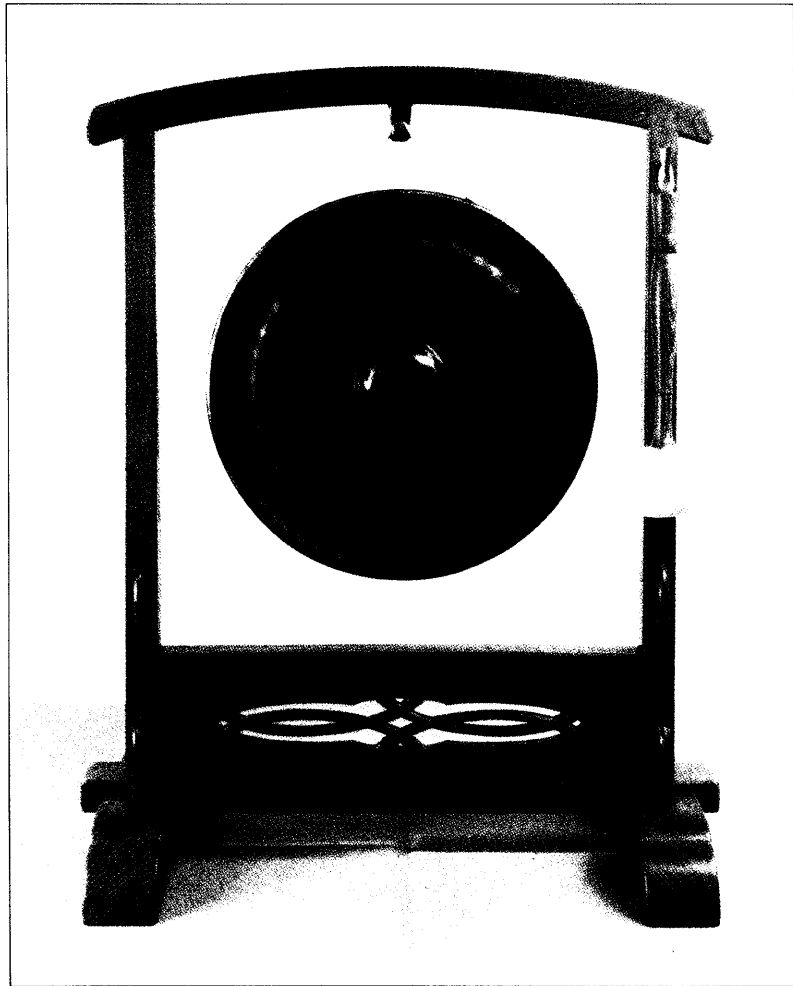
これらの貴重なる業績が、この月に相前後して登場したのも光輝ある奇縁である。もちろん、年数や回数が多いだけをもって尊しとは決して言えない。肝要なのは、その内容の如何である。

会報は、ロータリー教科書の最も重要な一つであり、例会はロータリーの修練の道場

即ち教室であり、四カ年の経過は大学の修了である。ここに立って、われわれは、いま自覚と反省を深め、いよいよ次の課程への進学に努めねばならない。基礎は出来た。ロータリアンとしての個人はもちろん、全会員の連帯による共同作品であるクラブ活動も、共にこれからが正念場である。

金沢北RC四カ年の独創的ユニークなる実績の主なるものだけを挙げて再吟味して見たい。

- (1) クラブ創立の記念事業の一つとして、ロータリー梅林建設の雄大なる計画を立て継続事業として発足。五一年春には第一次を完了、開花を見た。
- (2) 四九年十一月、「職業奉仕に関する石川県研修会」の開催を提唱し主催した。
- (2) 五〇年四月、ロータリー文献「お、ロータリアン」職業奉仕とは「八四頁を編集し、九、〇〇〇部が出版された。
- (4) 五一年三月、ICGFのホストとなり、ユニークな企画を推進した。
- (5) 五一年三月、かねて提唱の「域北地区開発促進同盟会」が発足し活動を展開。一九七六年度RIの「意義ある業績賞」を受ける。次いで「県立武道館」の誘致に成功。五二年六月、六億一、一〇〇万円の建設着工となった。
- (6) 五二年四月、第二次のロータリー文献「お、ロータリアン」ロータリーとは



砂 張 鉦 魚住安彦作

一五〇頁が編集され、五、〇〇〇部出版。

(7) クラブ創立第二年目に、世界随一であろう新機軸の委員会構成が実現した。職業社会、国際、例会、拡大、企画、情報、親睦、修練、友存、地域開発などで、委員長は全部理事であり簡潔に敏活な展開がある。

(8) 健康で明朗な職場と、労使の親交を深めるための、会員の職場対抗親善野球を創始、五一年度十四チーム、五二年度十三チーム参加、冬期には卓球大会を実施、望外の好評。

一段と清新な意欲を高め、ロータリーの正道、栄光を求めつつ、わが道を歩き続けようではありませんか。

“空高く金木犀のかおる朝”

(金沢北RC 会報No.100 昭和五二年十月十三日)

## 魚住安彦さんの略歴

昭和十二年十一月七日生  
自宅 金沢市長町一丁目七ノ十四  
金沢北ロータリークラブ会員。

「砂張鉦」音響の美しさ、砂張の沈んだ肌の美しさ、造形美、而して鉦はすばらしい楽器であり、美術品であり、茶道を色彩するものである。

昭和二十八年より祖父で「人間国宝」の魚住為楽（いらく）に師事。以来研鑽を重ねつつ今日に至る。

昭和三十二年 「現代美術展」初入选。

昭和三十四年 「日本伝統工芸展初入选」。

昭和五十八年 金沢美術工芸大学講師

この間、最高賞、文化財保護委員会々長賞、日本工芸会賞、石川県知事賞など受賞。

ジャパンアート・フェスティバル、ヨーロッパ、アメリカ巡回。京都高島屋、東京伊勢丹にて個展。五都展連続出品。

現在、日本工芸会正会員。

文化庁所蔵（砂張梨地鉢、砂張清海盆）。石川県美術館所蔵（砂張紋様水指）。

金沢市所蔵（砂張花器）。

## 一去一来

「浅田屋」さんの新装を祝して

料亭であり、旅亭でもあろう新生の「浅田屋」が、折からの桜と共に華麗に開花してお目見えした。敬愛する我等が盟友の香り高き躍動である。見識と若さと意欲に富む俊英達の浅田グループがどんなヒットをブチかますだろうか……と、祈りと期待をこめて待望した作品の見事なる完成に、心からの祝福を贈りたい。

さる日、新装成れる全館の拝見を請い一巡して、その新鮮、壮烈とも言える構想に深い感慨を覚えた。土一升、金一升の敷地に、二階建て延べ約四〇〇坪、控室を含めて客用僅か八室の、思いきりゼイタクな設営である。採算効率だけを考えるなら、また別なやりようもあつたらうに、敢えて、この道を選んだ英智と勇断に敬意を表して止まない。

定めし、先代夫人（尊母）を中心に、四天王がスクラム組んで衆知を集めたであろう快心の傑作と見受ける。

もちろん、亡き先代（尊父）の声なき声も働いたであろう……由緒あり歴史ある「金沢の宿・浅田屋」の劃期的、新スタートへの志向であり、「浅田グループ」発祥の拠点に金字塔を打ち樹てたものである。その一室（茶席）には「柳笛庵」と命名されている……当代兄弟の祖父の号からとったものと言う。別の一室「不老の間」に「一去一来……柳軒書」の額がかかっている……彼等の父君浅田勝次さんの願いをこめた筆蹟であり、なかなかの達筆である。その浅田さんとは生前私も懇意であったので、美術工芸には立派な見識を持たれていたのは、存じていた。しかし書を能くされるのは知らなかったが、この二つの孝心を痛く知らされて感動した。

先代以来蒐集された多くの貴重な鏝を始め、廊下に、各室に銘器名画があり、端正なる諏訪蘇山の青磁、鮮麗な宮本三郎の油絵、日本随一の陶工中村梅山の作品など数々に魅かれ、目を楽しませてくれる。客室はホテルの長所を採り入れ、個々に完全独立していていずれも庭が見え、空間と余白がある。玄関近くの待合の席は趣向がこらされて絶妙。随所に和風の美点と、洋風の合理性が調和されていて、清談に宿泊に、この上なく恰好であり、特に寝具には独自の心尽しがなされていると聞く。まさに、金沢に欲しかった「金沢の宿」がデビューしたのは嬉しい限りである。

辞去にあたり、今一度先刻、ドきもを抜かれた玄関に在る豪快な鞍馬のとび石を踏み直

し、「わがロータリーの同志よ、幸あれ」と念じたが、「一去一来」は、いつまでも私の臉を去来して止まらなかった。

（金沢北RC 会報No.10三 昭和五二年十二月一日）

直きを友とし、諒を友とし、多聞を友と  
するは、益なり

（友、直、友、諒、友、多聞、益矣）

友だちとして益になるのは、直、諒、多聞の三者である。すなわち、正直な人、誠実な人、見聞豊かな人を友とするのは益である。



## 光を求めて二十五年

220

### 記念例会の光栄

この秋、創立五周年を迎えんとして、若々しい活力に溢れる金沢北RCの皆さんの計らいで、古色蒼然の私に、思いがけない、思いやりと友情のスポットライトが当てられた。この日、貴重な例会を私のために……そして、私のロータリー二五年と、その皆出席を記念してやろう……という晴がましい限りの設定である。私は感激と歓喜と感謝で胸いっぱい、わがロータリー最良の日となった。

私は、かねてロータリーに魅かれつつ、いつの頃からか、ロータリーの理念は、キリストの愛、儒家の仁、仏門の慈悲などミックスしたようなもので、人生最高の道徳、処世最善の倫理、哲学として、私の信仰とし、心の支えとして今日に至ったのである。もちろんその実践には、まだまだ程遠く凡夫のあさましさに、常に心の葛藤と闘い、努めつつロータリーの光明を求め続けている始末である。

しかし、この間おこがましくも、ロータリーはこれでいいのだろうかと、「徳、孤ならず必ず隣あり」を描きつつ、いわゆるツケツケ、他人さまにまで行き過ぎが及んだようである。今、深く反省へ誘われている。

さて私の、この二五年は、私の人生と事業における最も重要な時期であり、苦難と激闘の時代であり、希望と情熱の節目でもあった。昭和二八年三月、谷村、柿下、福光の諸氏と共に同時に私ら四人が、当時、石川県ただ一つの金沢RCに入会。クラブは四五名になったと記憶しているが、当時のメンバーも今、数名を残すのみとなって、短かくて長かった二五年の重味を、しみじみ噛みしめている次第である。幸いにして私は、環境に支えられ、健康に恵まれて経過。この間、非力の中にベストを尽くし、ささやかながら私なりの足跡を残しつつ、望外の皆出席をも達成出来た。

私は今、改めて、当クラブを始め、金沢市の、石川県の、そして全国各地のロータリアン諸兄のご友情に心から御礼申し上げねばならない。筆舌をもって尽せぬ、多くの大きなロータリーの恩恵を蒙った。そして私は、満ち足りた喜びいっぱいである。

私は、これからの人生の余白を、七〇年に亘るもろもろなるご恩と、ロータリーへのご恩返しに捧げねば相済まぬと、心から思いを新たにしている。かような次第で、かねて念願の「米山記念奨学会」へ、この機会、ロータリー二五年に因んでの私なりの寄金も果た

したが、まだまだ借りは大きく残っている。

クラブの皆さんからは水野先生の芸術作品を記念に贈られる光栄に浴した。また、この日のためホワイトハウスさんは、お心尽しの赤飯に特別料理を、また当の私には、めで鯛も供せられて、私は胸の熱くなるのを覚え、ロータリーの友情と思いやりを身にしてみて訓えられた。

(金沢北RC 記念例会 昭和五三年三月十六日)

#### 柴田三郎会員満二十五年皆出席を記念して

金沢北RC会長 岡田林太郎氏

柴田会員二五年間皆出席、先づその偉業を称えてお目出度うございますとお喜びを申し上げます。二月中旬に事務局員より柴田会員が三月初旬でロータリー歴二五年で而も皆出席ですと報告を耳に致しました。

瞬間私は立派な事だなあ「あやかり」たいものだと思致しました。年月の過ぐるのは長いようで短いものと良く言われるが、ようこそ柴田会員偉大な業績を達成されましたなあ、特に金沢北RCが創立以来、日尚浅いので尚更その感を深くしたのかも知れません。同席の会員も異口同音に柴田会員に「あやかろう」ではないかと申し合せた次第です。

柴田会員が金沢RCに二五年前に入会され、数年後に金沢東RCに十数年在籍、そして金沢北RC創立の一人として現在迄、其の間偏にロータリー精神に則られ幾多の真韻な奉仕活動、私達の模範であり良き教訓を示されたのであります。

どうしてこの様なエネルギーが発揮出来るのでしょうかと考えて見ました。第一に健康であった事、真理の追求と責任性の旺盛、人間的に真面目で幅広い親睦と愛情の深さ、奉仕の理念に敏感、その他数々の理想の実現性等々が斯くあらしめたのではないのでしょうか。平々凡々の私には大いに学ばねばならぬ事と、常日頃感じている今日この頃でありました。金沢の五ロータリークラブの会員の内二五年の偉業を達せられた方は現在、柴田会員を念めて九名であります。その会員の社会的業績と地位を見聞致しましたが、皆夫々御立派な方達であります。一つに通ずるものは総べてに於ても通ずる譬の通りで、本当に羨しい限りであります。

二五年間の皆出席を考えて私自身現在七〇才を迎えましたが、あと一〇年のロータリー歴えは大変だ到底其の時の姿は？「あやかる」にしては夢の又夢で程々にと悟りを開いたのであります。

私は柴田会員を敬愛の見地から柴田先生とお呼びしたいのです。どうか柴田先生、今後共御身体を御自愛なされまして、尚一層ロータリー精神を通じて社会的にも家庭的にも一